



片言隻語・壺



断片社

西暦二千年代後半の頃。

人類は一度、地球に見切りを付けて旅立った。

資源不足。土地不足。環境汚染。それらが複合的な理由となり、新たな自分達の住処となる、地球にとって代わる惑星を探す事になったのだ。

彼らの目の前には、暗黒の宇宙空間に浮かぶ、一つの惑星が見える。そこが彼らの目的地。長い旅を掛けて辿り着いた、新たな場所となる予定の惑星だった。

「あれが……目的の惑星か。なんだ、中々綺麗じゃあないか。青々と輝いている様に見えるぜ。どうだ、住めそうか？」

「色々と観測して見たが、悪くなさそう。住んでいる知的生命体も、特に居なさそうだし、俺達は特に装備をしなくても、地表で活動する事は出来そうぞ。いやまったく、奇跡の様な存在だな、あの惑星は」

宇宙船の中で、二人の乗組員が、そう言いながら、その青々としている惑星を眺めている。

「これで、新たな移住先は決まった様なモンだな。今まで色々な惑星を調べて来たが、ここより良い場所は無かったしな。これから無線機を用いて、仲間たちに座標を知らせようぜ」

「ああ、そうだな。これでやっと、俺達の仕事も終わるな……」

彼らはその後、様々な作業を行う。無線を用いて惑星の位置を教えたり、地表へ向かう為の準備を整えたり、一足先に乾杯したり。やる事は幾つも有り、そしてそれを行った。

乾杯を行い、二人の乗組員が程良く酔っ払った時、一人が、こんな事を言った。

「なあ……。一つ、訊いても良いか？」

「ん。どうしたよ」

「いや、俺さ。どう言う事かは良く解らんけど、目の前にあるこの青い惑星に、来た事が有ると言うか、住んでいた事が有ると言うか。そんな気分になるんだけどさ、お前はそんなの、感じないか？」

「そりゃまた、変な質問だな。……俺はそう言う物は感じないし、って言うか、感じる方がおかしいだろ。俺達が住んでいたのは、ここから何千億キロも離れた所なんだぜ。もう今は隕石衝突で星その物が亡くなっているけど。……それに勿論、ここに来たのも記録上は初めてのはずだ。……酔って、ちょっと記憶がごちゃごちゃになっているんじゃないか」

「そっか。まあそうだよなあ。……でも、何かそんな風に思えるんだよなあ。おかしい感覚だ」

彼はそう呟く。自分でもおかしい事だと解っていても、心の奥深く、或いは脳みその奥深くでは、確かにそう感じていたのだ。この惑星には、来た事が有る様だと。

時代は西暦五千二百年。

そして、そこに居たのは『人類』。

一度地球に別れを告げて、他の惑星を住処として生き続けて来た人類は、図らずももう一度、地球のお世話になる事になった。

わたしは、『道』が見えていた。

道。これだけでは、一体どう言う意味なのかは解らないかも知れない。だが、この世界に居る人々は、わたしの言いたい意味を理解してくれるはずだ。何故ならみんな、道が見えているから。

道とはどういう意味なのか。簡単に、そしてはっきりと言ってしまえば、わたし。いや、わたしを含めた全世界の人々は、未来を知る事が出来ており、その知った未来を、『道』と表現するのだ。

未来を知る事は、誰でも出来る、当たり前的事だった。

誰もが、これから起きる事を知る。正確に言えば、自分にこれから起きようとしている事象を、知り得る事が出来る。解らない事は何も無い。

未来の自分が試験でどんな点数を取るのか、未来の自分にどんな出来事が起こるのか、それらは完璧に解り、

そして、絶対に覆る事は無い。

一度見た未来は、変える事は出来ない。試験での点数を一度知れば、どんなに勉強を行おうと、努力しようとして、見た未来の点数となる。一度自分の身に何か起こる事を知れば、それから逃れる事は出来ない。わたしはその事を良く理解している。何度も何度も、見た未来を変えようと試みたが、一度たりとも、変わった事は無かった。一度知れば、後は自分の意思など関係なく、そこに向かうだけ。

わたしは、本当にその事だけは解っていた。

だから、わたしは自殺しようとしている。

数日前。未来が見えた。数日後に、わたしはこの能力に悩み、そして自殺すると言う未来が。

だから、わたしは今、自殺する。未来がそうなっているから。

ある、五人の兄弟が居た。

その兄弟達は、非常に仲が悪かった。理由は無数に有る。例えば、親の学力至上主義の教育によって、勉強が出来る人、テストで良い点が取れる人が偉い、と教育された為でもあるし、また、単に性格が合わなかった、と言う為でもある。

物心付いた時から彼らは喧嘩をし、協力して何かを行う事も無かった。常に自分が、自分こそが、少しでも優位に立ってやろうと、そう思っている兄弟達だった。そんな状態が何年も、何十年も続いて行った。

ある日、各地から訪れた兄弟達は、十数年ぶりに一堂に会し、実家のとある一室の中で円陣になって、座っていた。

円陣の中心に有るのは、一つの紙。そこには『遺言状』と記されている。一体誰の遺言状かと言えば、その一堂に会している兄弟達の、父親の物だった。

彼らの父親は、一言で表すと『金持ち』だった。

古くから、実家の周りの土地を持っている人物であり、また過去を遡れば、それなりの歴史上の人物から、血も繋がっている人だった。

そして、彼ら五人兄弟の父親は亡くなる前に、彼らに向けて、一つの遺言状を残した。

だから彼ら五人兄弟は、互いに顔を合わす事さえ嫌々であったにも関わらず一堂に会し、その遺言状の中身を確認する事となったのだ。

だが、彼ら一人一人、そこに何か自分に不都合な事が書かれている、例えば遺産分配にて自分が少ない状態に置かれる、などが有った場合、実力行使も辞さない構えだった。

つまりそれは、兄弟の中の誰かを殺す、或いは脅す事も辞さない構えだったのだ。

それが兄弟達の考え。自分が一番であり、協力する事などは絶対に有り得ない、自分の為なら誰かを貶める事など構わない、と言う考えだった。

円陣の中の、兄弟達の一人がその遺言状を手に取り、ゆっくりと、畳の地面の上に広げた。そこには、達筆な字で、以下の様に書かれていた。

『私が保有する財産の全て。土地、株式、現金、貴金属、家、その他ありとあらゆる、金に換えられる物全てを、慈善団体に寄付をする事。一銭たりとも残さず、全てを寄付する事』

それをじっと、兄弟達は見つめていた。その文面を。

数分程、無言の時間が流れていた時、ふと、円陣の中の一人の兄弟が、こう呟いた。

「.....これを、見なかった事にしよう」

その呟きに、四人の兄弟達は、ゆっくりと頷いた。誰もかれも、これを見なかった事にする。遺言状は初めから、無かった事にしようと、協力する事にした。

それが彼らの、五人兄弟達の初めての、協力だった。

甘い匂い

ふと、家の中で何時もの様に過ごしていた私は、甘い匂いが、何処からともなく漂って来る事に気付く。

妙な匂い、だと最初は思った。

それは何と言うか、蜂蜜の様な甘さに、何処かほんの少し、酸っぱさも感じる様な匂い。今までそんな匂いなど嗅いだことも無く、妙な匂いだと思えた。

だが、そう感じたのも数秒程度だった。次第にその匂いが、とても良い物だと思える様になった。何処か心地良く、面白く、楽しくさせる様な匂い。惹かれる様に、私はその匂いの元を探し始める。この匂いの発生源に辿り着いて、もっと濃い匂いを堪能したかった。

匂いの元を探そうと、家からふらりと出る。

街中に出ても、その匂いは何処からともなく漂って来る。

あちこちを歩き、鼻を使い、こちらから来ていそうだと思う方向へ、ゆっくりと歩いて行く。途中、電車などは使わない。匂い自体は、家の中からも嗅ぐ事は出来たから、電車の中に入っても途切れる事は無い、とは思う。が、出所を探る為には、途中で気ままに移動出来ない電車は、役に立たないと思ったのだ。

あちこちを歩く事、一時間ほど。

ようやく、私はその匂いの元が有る方向を、何となく解った様な気になり、その思った方向へと、一直線に向かって行く事にする。合間にあるビル群を越えて、家々を越えて、店を越えて、都心から外れた、とある街へと、歩いて辿り着く。

そこで、見付ける。匂いの元が有る場所を。

いや、正確に言えば、見付けたのではなく、解ったのだ。

見えるのは、一つの建物。恐らく、数十階建ての高層ビルであり、その街の中でも一、二を争う高い建物だと思う。その建物は今、階層部分は全て草木で覆われており、そして屋上部分からは、巨大な、恐らく半径十数メートルにも及びそうなほど巨大な、青白い花が、生えていた。巨大な葉がビルの側面に垂れ下がるほどの物が、出現していた。

別に、何か思う事など無い。

そんな光景自体は、どうでも良かった。ビルにそんな物が生えている事自体は、気にするに値しない。そんな事よりも、そのビルの方向からあの匂いがして来る事の方が、私の意識は向く。

ようやく見付けたのだ。となれば、もう行くしかない。

そうして、ビルに向かって歩いていた時、ふと周りに、人が居る事に気付く。私と同じ様に、老若男女がそのビルに向かって歩いて行く。ビルを囲む様に、人が近付いて行く。皆、嬉しそうな顔をしている。

その時、私はふと、ぼんやりと思う。

まるでこのビルは、トリカブトの様だと。

私達はまるで、花に引き寄せられて罌に嵌る、虫達の様だと。

記憶

ある所に、記憶の達人が居た。

彼は一度見た物を、簡単に記憶する事が出来た。それはどんな難解な本でも、漫画でも、絵画でも、極めて精密に、一つの『画像』として、記憶し、そしてどれ程長い年月が経っても、正確に思い出す事が出来る、化物の様な人間だった。

その彼に、一人の青年は訊いた。

「そんな記憶力が有るのなら、大学受験とか、楽でしょう」

すると、彼は首を横に振る。

何故かと青年は訊くと、彼は一つ溜息を付いてから、こう答えた。

「だって、記憶しているだけだ。内容なんて、何も理解していない。数理系はお手上げだ」

ぼくは、信用出来なかった。

みんな、信用出来なかった。ぼくが良く知っている人も、良く知らない人も、みんな信用出来ない。みんなの言う事を、ぼくは信じる事が出来ない。

どうしてか、と訊かれれば、怖いから、とぼくは答える。意味はそのまま。怖いのだ、みんなの事が。

人と話をしていると、相手がどんなに笑顔であっても、また会話の内容が、どんなに笑える物、楽しい物であっても、ぼくの頭の中には、ふと、一つの疑念が湧き上がって来る。

——この人は、ぼくを馬鹿にしているんじゃないのか——

こういう疑念が、浮かぶのだ。

表面上見せている顔は、実は薄い段ボールお面の様な物であり、その内側の心の奥底では嘲笑っている、或いは馬鹿にしているのではないか、そんな考えが、どうしても離れない。

親、友達、通りすがり、誰と話しても一緒だった。根拠の無い疑念が、蛇の様に纏わり付く。

何時の間にか、ぼくは、機械に対してもそんな疑念を抱くようになっていた。

時計、パソコン、カメラ、携帯電話、電子辞書、電球、挙げればキリがないが、ぼくはこういう物たちも、ぼくを馬鹿にしているんじゃないか、と思う様になっていた。

どうしてそう思うのか？ と訊かれると、答えられない。明確な根拠は、正直言って無い。でも、確かにぼくは、そんな風な疑念を抱いていたのだ。機械はぼくを馬鹿にしている、嘲笑ってる、と。

ある日、ぼくは何となく、鏡を覗いた。小さな台が付いている、丸い鏡を。

そこに映し出されたのは、ぼくの顔。当たり前の話だ。自分が覗いているのだから、そこにぼくの顔が映し出されていなかったら、ホラー話の何物でも無い。

ただ、一つだけ、変な所があった。

ぼくの顔が、どういう訳か笑っていたのだ。自分自身では全く意識していないのに、笑っている。

しかも、その笑顔は、誰かを馬鹿にしている様な、そんな雰囲気を感じられる、嫌な物だった。

。

決め方

ある、一つの試合が行われている。

そこは、広い部屋の中。テニスコートが何個分も有りそうな、その部屋の中央には、二人のスーツを着た男が、机を挟んで向き合っている。だが向き合っている、と言っても顔を見ている訳では無く、机の上に置かれた物を見ていた。真剣な眼差しで。

机の上に有る物は、チェス盤と、専用の対局時計。

白色の駒と黒色の駒がぶつかり、小さな、しかし非常に複雑な戦いが起こっている。二人がチェスの対局を行い、数時間が経とうとしていた。局面は複雑が極まった様な、そんな有様であり、一手によって完全に勝敗がひっくり返る様な、そんな状況でもあった。

二人は白熱した戦いを続ける。相手を追い詰める一手を繰り出したり、或いは寄せを回避する手を繰り出したり、局面は複雑に変化する。しかしその戦いも次第に差が付き、有利不利が誰の目でもハッキリとして来る。

対局が始まって、数時間。その時が訪れる。

手番となっていた後手。チェスの駒では黒色を使う方が、ゆっくりと、『負けました』と呟き、手を机の上に差し出し、握手を求めた。それを受けて、先手番の人。チェスの駒では白色を使う人が、応じて、握手を行った。これで対局は終了する。

長く、対局者にとっては非常に疲れる一つの『戦い』が、その時点で終了した。

その様子を生中継していた、あるテレビ局で流れている番組の中で、キャスターが手元にある原稿を読み始める。

「.....はい、と言う事で今回の対局は、白番の勝ちとなりました。これで四勝目を挙げ、七番勝負は白番である『エルト公国』の勝ち、となりました。今回の勝利によって、予てから問題とされていた領土問題に関して、エルト公国が主導権を握る事になります」

キャスターは、淡々と原稿を読み続ける。

その世界は、国の合間の争い事は全て、チェスと言うボードゲームによって解決される仕組みとなっていた。各国間の代表者が出て、七番勝負を行い、勝った方の国が争いに関しての主導権を握る。血を流す事も無く、死者が出る事も無く、無駄に金を使う事も無い。

そんな一つの『戦い』が、そこには有り、そして世界の中で当たり前の様に行われていた。

ある、一つの事件が起こった。

現場は普段、人々が何気なく利用し、そして今現在の社会では必要不可欠な存在となっている、電車の中。その何処にでもある様な、電車の中である日、殺人事件が行ったのだ。

それは昼頃の時間帯だった。乗客も一両に数十人程度であり、丁度良く空いている頃。その時間帯の、何処にでもある様な路線の、電車の中で、とある一つの駅に止まる直前に、一人の男性がナイフで背中を刺され、地面に倒れ込み、そしてそのまま亡くなった。

刺した犯人は、数秒後駅に到着すると、扉が開いた瞬間に駆け足で逃げて行った。

当然、警察が来て騒ぎとなる。

が、この時現場に到着し、分析を始めた警察官は全員、楽観的な気分を持っていた。何しろ、白昼堂々と、しかも電車の中で人を刺したのだ。目撃者は多数居るはずであり、そこから重要な証言など、幾らでも取る事が出来る。警察官はそう考えていた。

だが.....。

「.....で、その話はどうなるんだよ」

そう、俺は目の前に居る友達に訊く。そいつは少しニヤリと笑ってから、続けた。

「結局、この後警察は、同じ車両に居た人全員に話を聴いたんだよ。大学生やら主婦やらリーマンやらにね。でも、結局何も得られなかった。それはつまりね、誰も見ていなかったんだよ。白昼堂々と、車両の中で人を刺した人間をね」

「.....何だそりゃ。有り得ねえだろう、そんな事」

「いや、有り得たらしいんだよ。現に少し前に、話題になったじゃないか。テレビ番組で」

と言われるが、俺には何の事か解らない。多分、テレビ番組をそんなに見ない方だからだろう

。

「良く解らない。一体どうして、そんな理解不能な事になったんだ」

「実はね、正確に言うと見なかったのではなく、気付かなかったんだ。他の事に注意が向いていたんだよ。他の事に視線を向けているから、誰も電車の中なんて、見ていなかったんだ」

「他の事に、視線が行く。.....もしかして、それって」

ようやく、どうしてそんな事になったのか、答えが解った様な気がする。ふと電車の中をイメージすれば、その中に居る乗客、俺も含めた乗客は殆ど基本的に、椅子に座っても立っていても.....。

「そう。つまり、その車両に乗っていた乗客全員、携帯電話やらゲーム機やらを弄っていて、誰一人として、電車の中を視ていなかったんだ。.....自分が居る、電車の中を」

五感の体験

ある日、交通事故によって死亡し、ふと気付けば俺は、『幽霊』と言う非現実的な存在になっていた。

生前、幽霊の事をぼんやりと想像していた通り、空は飛べるし、壁は擦り抜けられるし、自由気ままに過ごす事が出来る状態だった。実に、良い生活だった。誰も自分を見る事も無く、どう言う訳か俺以外の幽霊の存在も居ない様に見える、本当に好き放題に行う——と言っても物体に触れたり、誰かに声を聴いて貰ったりする事は出来ないが——事が出来る様になっていた。

しかし、ただ、一つ。

一つだけ、俺は悲しみを味わう事になる。別にそれは、他人から認識して貰えなくなり、孤独になったから、と言う物では無い。むしろ個人的に、孤独は歓迎な方だ。

一言で表せば、それは『人の流れ』だった。

俺が過ごしている合間、人々は流れて行く。人間の時間間隔が無くなった俺は、普通の人間では到底知る事が出来ない様な未来を、一つの存在として知る事が出来てしまう。

十年後の未来も、三十年後も、五十年後も、百年後も、三百年後も。俺は見続ける事になる。終わりなどは恐らく、無い。そしてその過程で、俺は『悲しみ』を覚えるのだ。当たり前の話なのかも知れないが、いずれ人々は衰退し、滅びてしまう。長い時間を掛けて、『盛者必衰』、と言う言葉がそれを表しているだろう。始まりが有る物は、終わりも有るのだ。

勿論、普通の人間にはそれを、一から十まで見届ける事など出来ない。その途中で亡くなる。

しかし、俺は出来てしまう。一から十までを、見続ける事が出来てしまう。命の縛りは無いからだ。様々な要因で滅びへと向かっている人類の姿を、見続ける事になる。二つの意味で無駄なんだろうとは思いつつも、頑張っ生きてようとする人々を、応援してしまう。何時までも、人類と言う形は残って欲しい、と願ってしまう。

数千年後。俺は独り、地球で過ごしている。人間は遥か昔絶滅しており、日々過ごしていても、誰かと出会う事は無い。その状況を、俺は悲しく感じている。

繰り返すが、別に、孤独なのが悲しいのではない。

何千年の歴史が有った人類の文明が、自分が見ている合間に消え去ってしまったのが、悲しいのだ。

失敗作

ぼくの目の前には、白い門があった。

だけど、ここに門など有るはずが無い。ここはぼくが何時も使っていた遊び場。近くで建設予定のビルの資材が主に置かれている場所だ。昨日もぼくはここで遊んだ。その時門は無かった。建てられる様な雰囲気も無かった。

だけど、今日は有る。

柱の太さは多分、一メートル程。真っ白な柱が二本建ち、その合間は、鳥居の様な物で繋がっている。真っ白過ぎて、眩しく感じるほどだ。

門自体も奇妙だが、その門の先もまたさらに、奇妙だった。

門の向こう側が、見えないのだ。白い霧で覆われていると言うか、曇っていると言うか、その先がまるで見えず、おまけに何処か、冷気までも漂って来ていた。

何となく、ぼくはその門の中に、入る。

白い霧の様な物に、特に冷たさは感じなかった。それに、息苦しさも無い。ただそこに有るだけの様な感じ。ぼくはとりあえず、歩いて見る事にした。真っ直ぐと。

多分、数分程歩いた頃合いだろうか。

突然、霧が一瞬の内に晴れた。そして現れたのは、何やら黒い防護服らしき物を着た、人が一人。多分男性だと思うが、ぼくに向かって話し掛けて来た。

「おう。お前か。あの門の中に入ってこれた奴ってのは」

「.....門って言うと、あの白い門の事ですか。それなら、普通に入る事が出来ましたけど.....。と言うか、ここって一体何なんですか。あの門とか霧は一体.....」

「ふむ。成程ね。それは答えるけどさ、その前に、君に一つ訊きたい事が有る」

「は、はあ。何でしょうか」

「もし、自分の命が失う代わりに、他の見知らぬ誰かの命が、何人も救われるのだとしたら、君は自分の命を捧げようと思うかな。自由に答えてくれ」

ぼくは考えて見る。一体自分がその様な状況だったら、どうするのか。どう考えるのか。そうして数分程考えた結果が出た。

「.....そうですね。ぼくだったら、受け入れると思います。自分の命で、誰かが助かるとなったら、不満はあまり無いです」

「.....成程ね。やっぱりそうか」

そう言うと、男は背中に掛けていた鞆を下ろし、中から黒く尖った物を取り出した。

俺は帰路に付きながら、ぶつぶつと呟いていた。先程発見した、『失敗作』に付いて、悩みながら。

「全く、やはりまだ残っているんだな。ああ言う失敗作が。こっちは減らそうとあらゆる努力を行っているのに、探せば探すほど残っている事が判明する。うんざりするね」

腕に付いている計測器を操作する。デジタル画面には、残りの数が表示される。総数は全世界に大よそ数万。まだまだ残っている。

「アホらしい。俺達はお前ら人間を創って、繁栄させようとしているんだ。自己犠牲精神とか、他人を思う気持ちとか、そんなモン要らねえんだよ。どんな状況だろうが、全てを敵にしようが、死に物狂いで生きて貰う必要が有るんだよ。生き物ってのは、そういう物になる様に設計しているんだが、人間は設計ミスかね……」

そんな事を、呟いた。

片言隻語・壺

<http://p.booklog.jp/book/91619>

著者：断片社

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikigai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91619>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91619>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ